

## 1 手法の基本について

はじめに

霊枢・九鍼十二原篇より

「凡そ鍼を用ふる者は虚すれば之を實し、滿れば之を泄す。宛陳すれば之を除き、邪勝つときは之を虚す。大要に曰く、徐ろにして疾きときは實し、疾くして徐ろなるときは虚す。実と虚とは有るが若く無きが若し。後と先とを察るは、存するが若く亡するが若し。虚を為し実を為すは、得るが若く失うが若し。虚実の要、九鍼最も妙なり。補瀉の時、鍼を以て之を為す。」

### ①補法について

「補に曰く、之に随ふ。之に随ふの意は、妄りに行くが如し、行くが若く、接するが若く、蚊虻の止まるが如く、留るが如く、選るが如く、去ること弦絶の如し。

左をして右に属せしむ。其の氣、故に止まる。外門己に閉じて、中氣乃ち実す。」

補うと言うことは、繕う、修繕、助けること。(破れた所に布を当てて修繕する事の意。)

使用鍼は、銀の1・2番(長さ1寸・1寸3分)、或いはてい鍼。

### ②瀉法について

「瀉に曰く、必ず持ちて之を内れ、放ちて之を出す。陽を排して鍼を得れば邪氣泄るることを得る。」

瀉とは、注ぐ、移す、下す、洩らす、の意あり。(余計なところから足りない所へ移すなどの意。)

使用鍼は、2・3番(長さ1寸・1寸3分)で、材質には拘らず、実の程度により選択する。

## 1. 補瀉手法の心得

患者の体質によっては、穴所に鍼を近付けただけで気が動いたり、接触しただけで、脉状や病証に変化を現す人がいる。その反対に接触鍼のみでは気が動かない人もいる。

従って毫鍼に限らずてい鍼、員鍼、ざん鍼など、古代九鍼を適宜選択し使用することを、診察段階で見極めなくてはならない。

## 2. 姿勢

①刺鍼可能な姿勢を保ち、ゆったりした気分で自然体に構え、目的の経穴部位を静かに経の流れに従い軽擦し、虚実の反応をわきまえて取穴する。

②取穴に際しては指圧を強くすると微妙な反応を見落とす事になるし、経の流注に逆らう時は気の流れに乱れが生じ敏感な患者は不快を訴えることがある、証が合っしょくても補の目的に反する結果となり、誤治と同じことが起こる。これは、刺鍼技術の未熟さによるものではない。従って一つ一つの動作には細心の注意が要求される。

③正確に取穴ができれば、そのまま指先に力を入れることなく母指と示指を軽く合わせる。この時の押手の下面は密着するように心がける。これが押し手の基本形である。

④刺鍼時の術者は臍下丹田に氣を入れる。これによって下半身はしっかりして、背骨は伸び且つ肩・肘・手首の力も抜け自然体になる。

⑤押し手となる左手の小指球又は母指、示指以外の固定する指にて、押し手の安定を計りながら手を置く状態にする。これによって母指・示指を自由に操作する事ができ、押し手として最も軽い状態である。

⑥場合によってはやや浮かしぎみにする事もあるが、この時にも母指と示指を少し浮かしぎみにするというので、上肢全体を挙げると体に力が入った状態となり押し手の安定は得られない。

⑦穴所と押し手は密着した状態を保たなければ気が洩れる事になるので、浮かすといって

も皮膚から指が離れるというような状態になる事は有り得ない。

この姿勢は刺鍼前の状態だから、補瀉共通の心構えである。

### 3. 補法

- ①刺し手にて竜頭を軽く持つ。
- ②押し手の母指と示指の間に、経の流れに従って、鍼を静かに皮膚面に近づけ刺入する。
- ③手応えによって刺入深度を察知する。
- ④押し手の母指、示指を密着させ気が洩れないようにする。
- ⑤穴所に気の充実を感じ得たら速やかに鍼を抜き去る。
- ⑥押し手はそのままやや留め、徐々に穴所から離す。

### 4. 瀉法

- ①邪気をとる（瀉す）事を目的とする。
- ②経の流れに逆らって刺鍼する。
- ③鍼の深度は抵抗を限度とし無理に刺入しない。
- ④抜鍼は抵抗緩む（邪気を除く）を限度とする。
- ⑤刺鍼は速刺徐抜を原則とする。
- ⑥鍼口は閉じない。

以上、補瀉の手法を述べたがいずれの場合も前揉捻、後揉捻は行わない。

## 2 取穴法の基本について

### 1. 取穴法とは

取穴法は、鍼灸医学の中では最も臨床に即した重要な技術であり、刺鍼と一体となることが基本となる。

### 2. 姿勢について

刺鍼可能な姿勢を保ち、余分な力を抜いた「自然体」が最も良い。

患者の姿勢は、無理が無く、無駄な力が入らない様にし、経絡を自然に伸ばした体位が良い。

### 3. 指の使い方について

#### ①取穴法の目的

正しい経穴に正確な刺鍼を可能にする事にあるから、指の使い方が重要である。その為には鍼尖が経穴に触れる所で取穴出来る様に修練する必要がある。

#### ②取穴の実際

経穴のモデル点をしっかり学習し、その周辺を流注に随い、極軽く、静かに滑らかに皮膚面を探り、経穴の変化を捉え取穴出来る事が必須条件となる。

### 4. 経穴の反応について

虚の経穴所見は、陷下・弛緩・冷感・枯燥・脈微かに動ずる等を基本とする。

実の経穴所見は、発赤・熱感・緊張・圧痛・硬結等を基本とする。

臨床の実際では、経穴が現すこれらの反応の中に、わずかな窪みがあり和緩を帯びた「生氣」を察知する。これが生きて働く経穴の所見である。

<実技研修進行マニュアル（参考）>

## 1. 基本刺鍼の研修のポイント

- ①まず、自然体で経脈の流注に随い「軽擦」し行う。軽擦法には「取穴」と「催気」の目的がある。「軽擦」は上肢全体を軽快に使う。
- ②取穴に際しては、経脈の幅を意識し経穴を探す事。モデル点が正しい経穴とは必ずしも一致しない事に注意。
- ③刺鍼の姿勢は、自然体で取穴と同時に押手を構える。
- ④左右圧は意識的にはかけない。気の動静に合わせる。

- ⑤「催気」の為の手技は特別の場合を除き行わない。刺鍼に際し気を集中し呼吸に合わせて「気を入れる」ことを専一とする。
- ⑥刺鍼の深度は気の動きに合わせる。場合によりてい鍼を使用する。
- ⑦抜鍼時の鍼口は無理には閉じない。自然な操作をとる。

## 2. 小里方式による進行のポイント

- ①脉状・腹証・寒熱等の病態変化に注意し研修を進める。
- ②問診を基本にして病因を追求する。
- ③病症の病理を推理する。
- ④病理を脉診により確認する。
- ⑤病理考察を応用して「証」を決定する。
- ⑥治療を通して病理考察等を検証する。

以上 作成 天野靖之

## 《参考・引用文献》

- 『臨床に生かす 古典の学び方』 池田政一著 医道の日本社
- 『臓腑経絡からみた薬方と鍼灸』 池田政一編著・監修 漢方陰陽会
- 『漢方鍼医』 漢方鍼医会編